

氏名 上田 友紀子  
学位の種類 博士(音楽)  
学位記番号 甲第26号  
学位授与年月日 平成31年3月25日  
論文題目 フランツ・シューベルトの後期ピアノ・ソナタにおける反復と変奏  
ーリズム・モチーフの分析に基づく考察ー

学位論文等審査委員

<リサイタル審査>

主査	教授	砂原 悟
副査	教授	阿部 裕之
副査	講師	池上 健一郎

<論文審査>

主査	教授	砂原 悟
副査	教授	阿部 裕之
副査	講師	池上 健一郎

# 論文要旨

本論文は、フランツ・シューベルト (Franz Schubert, 1797-1828) の後期ピアノ・ソナタを対象としたリズム・モチーフに基づく分析によって、これまで否定的に評価されがちであったシューベルトの反復技法の再評価に繋がる糸口を探ることを目的としている。

「リズム・モチーフ」とは、旋律的、和声的な特徴を度外視した、純粹にリズム的な短いひとまとまりを指し、一般的な「モチーフ」と区別するものである。シューベルトの後期のピアノ・ソナタにおいては、このリズム・モチーフの反復が主題間や形式部分間をつなぐ役割を担っており、作品全体を密接に関連付ける手段として用いられている。

本論文は3章から成る。

第1章では、シューベルトのピアノ作品を概観し、その中でのピアノ・ソナタの位置について論じた。リズム・モチーフの反復技法が用いられているソナタは晩年のものに限られ、本論文では主に後期のものを取り上げて考察してゆくため、まずはピアノ・ソナタの時代区分を明確にした。

第2章では、シューベルトのピアノ・ソナタに見られる様々なレベルの反復を取り上げ、繰り返される単位の大きい順に考察した。具体的には、形式部分の反復、小節ブロックの反復、リズム定型の反復、同音反復という4つの側面について検討している。

形式レベルの反復は、各形式部分の小節数を時代区分で比較してデータ化することによって、後期につれて長大化しているさまが明らかになったが、小節ブロックの反復でも同様の傾向が見て取れる。特に、小規模な旋律ブロックについては、後期に向かうにつれて一般的な2回ではなく、3回の反復が頻繁に見られる点が注目される。

有名なダクテュロスのように、楽曲において頻繁に用いられるリズム定型は、それぞれが反復されることで様々な曲想が性格づけられ、主題の中にモチーフとして用いられることもある。同音反復も同様に、楽曲に応じた様々な効果を生み出している。

また、各時代区分でこれら反復技法の用いられる頻度を比較した際に、特に同主調での旋律的反復と、旋律の中の同音反復は、後期にかけて頻度が高くなっている点も興味深い。シューベルトが時を追うごとにこれらを独自の作曲技法としてわがものにしていったと推察されるだろう。

第3章では、第15番 D840 以降の後期ピアノ・ソナタを対象として、シューベルトがリズム・モチーフを反復することによって、どのように楽章全体を有機的に関連させているかについて検証した。後期ピアノ・ソナタは全て4楽章制を取っているため、楽章ごとにリズム・モチーフの反復に着目した分析を行っている。分析に際して、シューベルトがリズム・モチーフによって楽曲を展開、統一してゆく手法を明らかにするために、リズム譜 (リズムのみを抽出した楽譜) を適宜使用している。

ソナタ形式に基づく第1楽章をリズム・モチーフの観点から分析すると、第15番 D840 から第18番 D894 と、第19番 D958 から第21番 D960 では、その用法に違いが見られる。前者にお

いては第1主題と第2主題，後者においては推移部とコデッタに共通するリズム・モチーフが用いられているのである。

また，三部形式や五部形式，ロンド形式を取る他楽章においても，シューベルトは[A]主題と[B]主題，または主部とトリオ部などに共通するリズム・モチーフを用いたり，リズム変奏によって各主題の統一を図ったりしており，その手法は多岐にわたる。

シューベルトのピアノ・ソナタは，旋律や和声的には冗長ともいえる側面を持っているが，リズム・モチーフに着目した分析によって，むしろ楽曲を有機的に統一させようとするシューベルトの意図が浮かび上がってくる。本論が提示する新たな一面は，そうしたネガティブな見方にのみ囚われている演奏家にとっても価値あるものになるであろう。

# 審査結果の要旨

## <リサイタル審査>

このリサイタルは、2018年12月18日（火）18時～19時30分の間、本学講堂にて下記のプログラム・内容で行われた。

### プログラム

- 1 シューベルト：ピアノ・ソナタ ト長調 D894
- 2 シューベルト：3つのピアノ曲 D946
- 3 シューベルト：ピアノ・ソナタ イ長調 D959

演奏は全般的に非常に丁寧で、集中力があり、あらゆる箇所に周到な配慮がほどこされた質の高い演奏であった。時間をかけて入念に準備されていること、そして作品への敬意が随所に伺える。作品を客観的に見つめる演奏者としての態度が好ましく、直情的に走ることなく適切な距離を置きつつも、箇所によってときに温かく柔和な情感、ときに激しく厳しい心情を明瞭に表現して、説得力がある。

彼女の研究テーマは、シューベルトのピアノ・ソナタを、そのリズム的特徴から分析することであるが、リサイタルの初めと終わりの長大な2つのソナタの演奏には、綿密な分析を通じて得られたであろう作品への理解が反映されていたように感じた。

プログラムノートには各曲の楽曲分析がコンパクトに、しかし的確にまとめられていた。また挨拶文の中にも D894 と D959 のリズムの扱われ方の違いが明確に述べられ、両ソナタの性格の違いを演奏に反映していることを窺い知ることができる。

両ソナタのうち、特に D959 は、長さを感じさせない演奏で、一貫性のある整然とした解釈が示された。

また3つのピアノ曲でも、それぞれの作品の性格が明確に描き分けられていた。

「円熟した演奏」と形容できるまでには、未ださらなる研鑽の余地を残すものの、博士課程学位申請リサイタルに相応しい演奏であると、全員一致で合格と判定された。

## <論文審査>

### 審査の方法

2019年2月12日（火）の午前11時から行われた公開発表会では、受審者がパワーポイントと配布資料を用いて約40分にわたって博士論文の概要と主な研究成果について説明した後、約10分間、会場との質疑応答を行った。続いて、約45分にわたって審査員3名による論文審査および関連分野

についての口述試験が行われた。最後に、本人退席のうえで審査員による審査および合否判定がなされた。

### 審査の内容

本論文は、フランツ・シューベルト（1797-1828）のピアノ・ソナタ作品における反復、変奏技法の諸相を、主にリズムの観点から考察するものである。シューベルトのピアノ・ソナタは、これまで過度の反復ゆえに構築性に欠けた冗長な音楽として否定的に評価されることも少なくなかった。しかし、受審者はそうしたステレオタイプな理解に異を唱え、シューベルトにおける反復に、彼のソナタ作法の根幹にかかわる重要な意義を認めようとしている。

第1章は、シューベルトのピアノ作品の概観に充てられている。まず、全てのピアノ作品を俯瞰し、その中でのピアノ・ソナタの位置づけを確認した後、ピアノ・ソナタ創作史を三つの時期に区分する。そして、シューベルトが、習作的な作品が連なる初期（1815～1817年）、未完に終わった作品が多いいわゆる「クリーゼ（危機）の時期」（1818～1822年）を経て、1825年頃から本格的なピアノ・ソナタの創作へと舵を切ってゆくさまが、形式、楽章構成、規模などの面から過不足なく記述される。それによって、本論文が後期ソナタ（第15番～第21番）を主な分析の対象とする根拠が明らかになっている。

第2章では、全ピアノ・ソナタ作品の体系的な調査を通じて、シューベルトに見られる様々なレベルでの反復技法が整理される。受審者は、形式部分の反復、小節ブロックの反復、リズム定型の反復、同音反復という4つのレベルを設定したうえで、それぞれに関してシューベルトが用いている反復の手法を丁寧に列挙するとともに、それらが楽曲の脈絡に置かれたときにもたらす効果にも随時言及している。これまでシューベルトのピアノ・ソナタの特徴として漠然と反復が語られることも多かったが、受審者は本章において、それがじゅうぶんに類型化可能であることを示すのに成功している。また、同じ小節ブロックを慣習的な2回ではなく3回繰り返したり、反復の際に同主調に転調したりするなど、シューベルトにしばしば見られる手法が後期に向かうにしたがって増加するという傾向も指摘している。

本論文の核心となる第3章では、リズムの反復と変奏の技法に焦点が絞られる。本章の特徴は、第15番（1825年）以降の後期ピアノ・ソナタを、リズム・モチーフ（旋律的、和声的特徴を度外視した純粹にリズム的なひとまとまり）の使用とその展開、変奏法という切り口から論じている点である。受審者は、主題に含まれるいくつかのリズム・モチーフの存在が、一見性格の異なる複数の主題や各形式部分の間に音楽的な関連性を与える鍵として機能しているさまを、豊富な譜例とともに丁寧に検証してゆく。一連の分析の結果、シューベルトにおけるリズムの反復は、たとえ時として冗長に感じられるとしても、作品全体を有機的に統一する手段として不可欠であり、同時代を生きたベートーヴェンとは異なるシューベルト独自のソナタ作法を支える重要な要素であるとの結論に至っている。また、後期に作曲された7曲のピアノ・ソナタの中でもリズム・モチーフの扱い方に違いが見られる点が指摘されているのも興味深い。すなわち、ソナタ形式の第1楽章に関して、第15番から第18番までは二つの主要主題に共通するリズム・モチーフが含まれるのに対して、第19番から第21番では、推移部とコデッタが共通するリズム・モチーフで結び付けられて

いるというわけである。

近年のシューベルト研究においては、シューベルトに対する否定的な評価の根底にあったベートーヴェン絶対主義に対する厳しい批判とともに、シューベルト独自のソナタ作法やその美学を探ろうとする動きが活発であるが、本論文もそうした潮流に属していると言って良いだろう。特に、リズム・モチーフという独自の分析装置を用いることによって、シューベルト作品の新しい解釈や価値づけにつながりうる視座を提示した点（第3章）は、本論文の重要な成果として特に高く評価することができる。また、全てのピアノ・ソナタを丁寧に調査したうえで呈示した反復技法の種類（第2章）も、今後シューベルト作品に取り組む者にとってきわめて有用である。

リズム・モチーフの判定やその変奏法の解釈に関しては、議論の余地がないわけではないが、それはおよそ全ての楽曲分析に付きまとう問題であり、本論文の価値を本質的に損ねるものではない。用語法の曖昧さなど、予備審査の際に指摘された問題点も全てクリアされているため、論文審査および口述試験は審査員満場一致で合格と判定された。